
Demon's heart

柳 リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Demon's heart

【Nコード】

N1391Z

【作者名】

柳 リョウ

【あらすじ】

デリエスタ王家で王位継承権を得るには、ある一族の人間と契約をしなければならぬ。……が、第一王女マリアナの契約相手は契約を不服とする自分勝手な騎士。横暴騎士と猫被り姫の、歪んだ主従関係は果たして覆すことが出来るのか！振り回し、振り回されながら、大切なものを見つけていくミステリー風味王宮ファンタジー。

ニコツとタウンのブログにて別タイトルで連載中です。いち早く読みたい方はそちらへどうぞ！といってもそこまで進んではいません

が
^
^

第一話 横暴騎士

デリエスタ王家の歴史は三百年にも上る。

かつて内乱の絶えなかったデリア地域をまとめ上げた初代国王たるローグは、神より与えられた神力により、数多の小国をまとめ上げ、現在のデリエスタ王国を作った。

そんなローグは、通称魔王と呼ばれる。

悪魔を従え戦場を駆ける、魔の王と。

本当に悪魔を従えていたのか。その真偽は、確かではない。

けれど、彼の傍に常に血濡れの瞳と濡羽色の髪の鬼神のごとく強い男がいたということ。

そしてその男の子孫が、今もなお、デリエスタ王家に仕えていること。

それだけが、事実。

デリエスタ王家の王位継承権は、ほかの国よりも少々複雑である。もともと、デリエスタ王家は王妃は三、四人であるものの、産めよ増やせよ主義であり、王子王女は20に近い。

彼ら全員に王位継承権を与えるとすると、必然的に壮絶な王位争いが始まる。

そこで定められた掟は、忠臣である悪魔の血を引く、ドレーク一族の人間が主と定めた人間が王位継承権を手にする、というもの。

実際は、二段階の契約によりドレーク一族の人間を自分の配下として縛り付けられた人間が王となる資格を与えられるというわけだ。一つ目は、血による契約。二つ目は、名による誓約。

この場合、ドレーク一族の意思にかかわらず、強引に契約だけは結んでしまうことができる。するとドレーク一族の意思は無視され、忠誠を誓ったことにはならない。

……で、忠誠を誓っていない配下と契約を結ぶとどうなるかという、今現在の私と同じ状態になる。

「おい女、酒をもってこい」

「……………女ではありません、デリエスタ第一王女マリアナ・ウィル・デリエスタです！！」

「なんだ、女じゃないということはお前は雄だったのか？それは恐れ入った。その胸にある二つの肉塊はどこで手に入れたんだ？」

「口を慎みなさいっ！！私はあなたの主で」

「ああもういい。おいそっちの侍女、酒を持って来てくれ酒を」
まったく話を聞いていない。

ぎりりとにらみつければ、さらに眼力を持つ赤の瞳と目が気だるげにこちらに向けられる。あくまでも気だるげに、だがしかしその眼力は強い。

悪魔の血を引くという、ドレーク一族。彼らの特徴は黒髪と、血染めの紅い瞳だ。その瞳は、見るだけで全身を身震いさせるほどの恐怖を覚える。

ふと視線を廊下に走らせると、身を小さくしているメイドがいた。手には酒瓶、さっき酒を取りに行った者だろう。

完全に怯えきっている彼女に苦笑をこぼしながら、私は彼女に近寄る。

「ひ、姫様、あの、その……っ」

「いいわ、私が渡しておきます。あなたはもう下がちなさい」

「は、はい！ありがとうございます！」

一瞬にして表情が輝き、脱兎のごとく立ち去りかけたメイドは途中で思い出したように立ち止まり、恐る恐る戻ってくる。

「それと、もうしばらくしてからファディ殿下がこちらにいらっしゃるそうです」

「あらそうなの？わざわざありがとう」

全力の笑みで労えば、今度こそメイドは逃げていった。

「メイドがアレではお前も大変だな。処分してやろうか？」

「メイドよりむしろあなたのほうが大変です。まったくもう……」

この男が怯えられているのにはその容姿とはほかに、もう一つ理由がある。

この屋敷にやってきた当日に、メイド三名兵士五名を切り殺すという大惨事を引き起こしたのだ。

それ以来、この男に近づきたがるものがほとんどおらず、傍に置いてあるこちらも被害を被っている。

「それよりも、今日は来客があります。身内の非公式な訪問ですが、くれぐれも身勝手なことはしないように！」

「うん？これはなかなかの美酒じゃないか。産地はどこだ？」

「聞いているのですかあなたは！！」

「聞く気がない」

いっそ潔いほど忠誠心というものを持ち合わせていない男。彼が私の配下である。

名前はまだ知らない。教えてもらえていない。

第二の誓約は、いまだ結ばれていなかった。

第二話 嵐の如く

「や、姉さん元気？」

それから約一時間後。相変わらぬの飄々とした笑みを浮かべて、異母弟であるファディ・ルーリア・デリエスタがやってきた。傍には、彼の配下であるドレーク家の男性。

「ファディは相変わらず元気そうね」

「うんまあね。優秀な補佐もいるし。で、姉さんのほうは少し疲れてる？」

「けっこう」

ファディは苦笑いを浮かべ、傍に付き添っていた黒髪の男性を振り仰いだ。

「カル、ちょっと席はずしてて。ついでにお兄さんの様子でも見てきて」

「はい、了解しました」

カル、と呼ばれた男性は柔和な笑みを浮かべて一礼し、その場を立ち去る。実に優雅で気品があり、アレの弟とは思えない。

「長男と次男でこれだけ性格に差があるってどうかと思うわ……」

「カルも最初はそれなりに荒れてたけどね。馴れた」

「……………今その爽やかな笑顔とつりあわない単語が出た気がするわ。ちょっと疲れてるのかしら」

引きつった笑みを浮かべて、それからため息をつく。

「それにしても、姉さんさすがに軽視されすぎじゃない？ どういう教育しているのかな」

「教育って、子供じゃあるまいし……、……」

苦笑がゆっくりと消えていく。

「私は、きっと彼の主にはなれないわ」

激しい崩壊音が、会話に割り込んだ。

「な、なになっ!?!」

「何? 何が起きた!?!」

とっさに腰を浮かせ音が聞こえた方角に身構える。

「あの方向……訓練場?」

確か兵達の希望によって作られた小さな訓練場があそこにはあった筈だ。

「……………いやあ、なんか嫌な予感がするなあ」

「同感」

軽く顔を見合わせて、そして駆け出す。

そう長く走らないうちに、こちらに向かって使用人が駆けて来た。「なにがあったの!?!」

「そ、それがっ! カル殿に訓練場をお貸したところ、崩壊いたしました……」

ファディがつんのめった。

「カルが!?! 何^{たが}箇所外してるんだアイツ……」

「とにかく行けば分かるわ」

再び長い廊下を駆け出す。目的地に近づくほどに喧騒は大きくなる。訓練場の前は人垣が出来ていた。

「静まりなさいっ!」

声を張り上げると、はっとしたように使用人たちが振り返る。自然と開いた道を割り込むように私はそこに足を踏み込……んだ瞬間、銀色の閃光が目の前を駆け抜けた。

「っ……!?!」

「……………、なんだ、お前か」

一瞬驚いたように見開かれた紅の瞳。

……明らかに私は視界に入っていなかった。

「邪魔だ、退いてろ」

「それよりも前に、この状況を説明して頂戴」

えぐれた地面。

なぎ倒されている木。

吹き飛ばされた訓練道具。

原形をとどめていない柵。

説明を求めた相手は、こちらをアウトオブ眼中。対戦相手、カルにのみ意識が注がれている。

ぴりぴりとした緊張感。ため息をつく、私は彼らの間に立ちふさがった。

「……邪魔だ、斬るぞ」

「契約を忘れました？ ログの名において、あなたは私を傷つけることは出来ません」

苛立たしげに眉を顰める。

「カル！遊びは終わりだよ。来い」

ファディのいつもよりやや低めな声が響く。それと同時に背中に感じていた殺気が掻き消えた。

けれど、前の殺気は消えない。

「剣を収めなさい」

「お前の命令を聞く気はない」

睨み合う。先に折れたのは、目の前の男のほうだった。

静かに剣をしまうと、そのまま歩き出す。すれ違いざま、低い声で囁いた。

「俺はお前の命は守るが、命令を聞く気はない。それでいいといったのはお前だったな？」

きつく拳を握り締める。足音が喧騒にまぎれ聞こえなくなるまで。

「そうよ。それでいいと最初に言ったのは、私」

第二話 嵐の如く（後書き）

感想、アドバイスなど、もしよろしければ下さい。
ほんの一言でも力になります。よろしくお願いします。

第三話 出会い

片手で数えられるほど、ほんの数日前。空を雲が覆い、少々暗い日だった。

午前中は晴れていた。大きな木の下で本を広げていた私は、その天氣に眉をしかめた。

（残念ね、いいシーンだったのにいったんお預けかしら）

屋敷に戻れば一人で読書をするような時間はなかなか取れない。なんせ私は16と年頃の王族の娘、やれ公爵子息だことの隣国の王子だことの縁談が山ほど降って来る。この時はまだ、私は王位継承権を持たなかったし、持てるとも思われていなかった。

けれどそれでも、縁談は嫌なのだ。何が悲しくて初対面の男と結婚して屋敷に押し込められて一生を過ごさなければいけないのだ。軽く体を伸ばし立ち上がろうとしたとき、何処かで物音がした。

（何……？）

かすかに漂う、金臭い臭い。

全身が凍ったように固まった。

素早く木の陰に隠れ、耳を澄ます。何の物音もしない。

しばらく経って、どさりと何かが地面に落ちる音がした。

ゆっくりと視界をめぐらせると、黒いずた袋のようなものが少し離れた草むらの影に転がっている。

それが人間だと気付いたのは、それから赤い血が流れているのが目視できた時。

私は周りを伺いながら、ゆっくりとその人間に近づいた。

その人間は、男性だった。年は20代前半から半ばほど。全身大小の傷だらけだ。

傷だらけ、だけれど。

「……何、これ」

ゆっくりと傷口が塞がっていく。赤く染まっていたむき出しの腕もだんだん血が止まっていく。数分あればすべての傷が塞がってしまうだろう。治療も手助けも必要がない。

まじまじと、男の顔を見た。

「ドレーク一族……」

ドレーク一族の人間は、さまざまな能力を持っていると聞く。運動能力も然り、回復能力も然り。

別の感情が、私の中を駆け抜けた。

ドレーク一族を無理やり契約させるのはとても難しい。意に沿わないものであれば撥ね退けるだけの力を彼らは持っている。例えばそれが王族相手でも。

けれど、衰弱している今ならば。

意識のない今のこの男ならば、無理やり契約させることが出来るのではないか。

どくり、と心臓が跳ねる。

多くは望まないから。私は王族として認められただけで、あなたに無理強いはいしないから。

胸元のブローチを外すと、金具を使って手のひらに一筋の傷をつけた。じわりと血がにじむ。

深呼吸を行ってから、塞がりかけている男の傷口に触れる。血が交わるように。

「魔導王ローグの名において、我を守り、我に従え」

その瞬間、男の深紅の瞳がかっと見開かれた。

驚いたように眼前に放り出してある自分の腕を見、そして私の手のひら、腕、顔へとゆっくりと視線が移動する。

瞳があった瞬間、後悔が込み上げた。

「お前、契約を……!？」

一瞬見開かれた瞳は、ぎらぎらと燃え滾るように危険な光を湛える。

「っ……………勝手にごめんなさい、でも、その……」

「……………」

切り捨てられるのでは、と思うほどの激しい殺気は、気付いたように急速に失望に変わった。

「……………契約がなければ、今頃お前の胴と頭は付いていなかっただろうな」

「ごめんなさい。勝手なことをしてしまって。でもあなたの力を借りたいの」

「強引に押し切られた跡に事後承諾か？」

冷ややかな声だ。引きつった喉を無理やり動かして声を吐き出す。「あなたの意に沿わないことは出来るだけ命令しないわ。あなたが嫌にならないようにこちらも出来る限りのことをする。傍にいてくれるだけでいい、それだけで十分よ」

それが愛情などという甘ったるいものを指しているのだと勘違いするほど鈍い男ではないようだった。男は薄く笑う。

「なるほど？ お前にとって俺はモノか」

「……………え？」

「王位継承権を持つ者である、と示すためのお飾りになれとでもいうんだろう。……………吐き気がする」

最後の言葉にびくりと身をすくめる。

低く低く、氷のように冷たい。

「べ、別に私はモノだなんて……」

「いいさ、痛い目にあった後だから今の俺は素直だ。お前が手放したくなるまで滑稽なお飾りになってやろうじゃないか」

男は軽く顔をぬぐう。全身の出血はほとんど止まっているようだった。

「……………この服もう駄目だな。服を用意しろ、女」

「……………分かったわ」

罪悪感。それだけが私の胸の中を占めていた。

このとき訂正しなかった男の偉そうな態度は、私の罪悪感が薄れ

た今になってもそのままである。

第三話 出会い（後書き）

初期の部分の展開の速さに我ながら驚くw

感想、アドバイスなどよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1391z/>

Demon's heart

2011年12月6日19時48分発行